

「この人たちを見て欲しい！」街頭に出たサバイバーのポートレート

梶村道子(ベルリン・女の会)

ベルリン市では1月29日、観光名所のシャルロッテンブルク宮殿正面の並木舗道に、大判のポートレートパネルが60点設置されました。「ナチズムの犠牲者追悼の日」にちなむ、同市のシャルロッテンブルク区と写真家のルイーゲ・トスカノさんが共催する野外写真展「忘れないために」です。

写真の主は、ナチズム下で強制収容所や強制労働を生き延び、現在、ロシア、ウクライナ、ドイツ、アメリカ、イスラエルなどに住む人たち。パネルには簡潔な被害歴の説明があるのですが、高さ2mを超える写真の前に立つと、その人が長かった人生を語りかけてくるようです。「忘れないために」プロジェクトのホームページには、展示の意図がこう記されています。「サバイバーは『想起する文化』の顔であり、声です。見る人に届く力を有し、その人を昨今の差別的、排斥的な風潮に敏感にさせる力があるのです」。

「ポートレートは、私たちの普段の顔ですが、その背後に隠された歴史があります。それを知ってください」。96歳のサバイバーであるマーゴット・フリードレンダーさんもこの展示の開会式でそう挨拶し、参列した学校の生徒たち——移民系住民の多い住区の学級に典型的な、多様な出自の青少年たちです——に呼びかけました。「私の中に流れている血も、他の人のそれも変わりがないんです。ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒を問わず。だから相手を尊重すること、みなさんはこのことを決して忘れないで」。ドイツでは、右翼排外主義者による移民系住民や難民の排斥と同時に、中東情勢の激化を反映して、一部では移民系市民とユダヤ系住民の間でも対立が生じています。それは外国

人排除を公言する右翼政党「ドイツのための選択肢」やその背後にある右翼急進主義にとって格好の動きです。ナチスの迫害を一身に受けたフリードレンダーさんはそんな中で多様な家族史を持つ若い世代に希望を託します。

写真展プロジェクト「忘れないために」が、イタリアからの移民2世ルイーゲ・トスカノさんの手で実現したのは、必然ともいえるでしょう。トスカノさんは、移民一世の父親のドイツ社会への不適応に始まる家庭崩壊と児童保護施設での生活、薬物依存と、社会の周縁部に押しやられて生きてきた経験があります。地元のマンハイム市で偶然、



宮殿正面の並木舗道に設置された「忘れないために」のパネル。この写真展は1月下旬から3月1日までニューヨークの国連本部でも開かれた。

亡命申請中の難民と出会い、市の郊外で一般市民から隔離されて生きているその日常を知ったとき、こんな言葉が彼の口をついて出たといいます。「君たちのこと、知ってもらわなきゃ」。そして2014年、同市に住む難民27人の巨大な顔写真が元消防署の建物の窓に掲げられ、難民問題が可視化されました。その結果、同市にも難民支援グループが結成されましたが、トスカノさん自身もこの体験を通じて新たな表現方法を見出しました。誰の目にも止まるように、屋外の公空間に巨大なポートレートを設置することです。20歳でアウシュヴィッツを訪問し、自分の生まれ育った社会の過去の歴史に関心があったトスカノさんですが、この表現方法を見つけたことで、それを自らのテーマにすることができたといいます。こうして2015年9月には同じ場所で、ナチズムのサバイバー70人のポートレート展「忘れないために」が開かれました。

それから2年後、昨年9月の連邦議会選挙では右翼急進主義の「ドイツのための選択肢」が第3党となり、92人の議員を議会に送り込みました。移民系市民のドイツ国籍を「劣等」国籍と呼んで二重国籍の撤廃を求めるなど、露骨な排外主義を早速議会で展開する同党に対して、2月23日の緊急動議では、同党を除く全政党がその歴史修正主義を厳しく批判し「想起する文化」の堅持を確認しています。トスカノさんは、この選挙結果が人々を揺り起こす契機になったとみています。2年前には彼のプロジェクトに全く無関心だった人や役所から声がかかるようになりました。だから「忘れよう」とする動きに対してドイツの民主主義はまだ十分対抗できると、トスカノさんは確信しています。それゆえ自身も「後に続く世代のためにこのプロジェクトを続けなければならない」と。

(写真撮影：梶村道子)



マーゴット・フリードレンダーさん。強制収容所からの解放直後に渡米、8年前に再び生地ベルリン市に戻り、証言活動を続けている。

展示の前で質問に答えるルイーゲ・トスカノさん。

